建学の精神「愛をもって仕えよ」に関する学生の意識

岩　井　勇　児

問題と目的

本学に赴任した1998年度は、創立100周年の記念行事がいろいろと行われ、新約聖書ガラテヤの信徒への手紙5章13節に基づく、本学の建学の精神、「愛をもって仕えよ」が、改めて強調される機会が多々あった。

また、専攻科が設置され、保育専攻では2年目を迎え、介護専攻では始めて学生が入学した年度でもあった。

本学で最初に担当した保育専攻2年生の授業に出席していた学生たちから建学の精神に関して、次のような話を聞いた。

一つは、幼稚園に勤めていたころ、いろいろ辛いことに出会うたびに、学生時代に聞いた建学の精神を思い出して、「愛をもって仕えよ」「愛をもって仕えよ」と、自分に言い聞かせて、辛さに耐えて乗り切ることができた、という話である。

もう一つは、当時、新設2年目ということもあって、保育専攻の学生たちが、保育専攻の指導体制や事務の対応などについて、かなり不満をもっている状態であった。そして、新入りの私に、学生たちがこうした不満を色々と訴えてきた。その折りに、「愛をもって仕えよ」という建学の精神なのに、学校側は私たちの教育に対して何もしてくれない、これでは「愛をもって仕えてくれない」である、といった意味に使っていた。

前者は、建学の精神を自分に対する言葉として受け止めているが、「がまん、がまん」と自分に言い聞かせるのと、たいして違わない使い方である。それは、自分の力や努力で守るべき道徳律に過ぎない。後者は、自分の問題ではなく、他人の行動を非難するために使っている。どちらも、聖書の文脈からは、ほど遠い使い方である。

一方、2000年度から開設された、「保育職論」の授業を現職の幼稚園長と共同で担当することになった。引き受けるにあたって、次のように要望した。本学は、入学時からほとんどの学生が保育者を志望している。したがって、保育職論を保育者意識高揚のための授業にしないで、保育者養成の教育課程全体を補完するような授業にしたい。そのために、保育職論を1年生前期に開設しないで、2年生後期に開設してほしい。

保育者養成の教育課程をみると、子どもに関することは、多くの授業でかなり重複しながら扱っている。したがって、保育職論では、それ以外の分野を扱った方がよいと考えた。

そこで、現職者には、大人とのつきあい方、すなわち、職員集団の問題と保護者の問題を中心に扱ってもらうことにして、私は、保育者自身の自我の形成を中心とすることにした。

これまで、本学に赴任して以来の期末試験の答案、授業評価の分析(岩井 1998, 1999)、および保育者意識についての調査(岩井 2000, 2001)などからみて、本学の学生に欠けているのは、自我の成熟であることを感じた。

すなわち、形式的操作が未発達で、論理的思考力が不足しており、講義の聞き方がきわめて情緒的であり、自己中心性から脱出できておらず、他人の視点がわからない、といったきわめて幼児的な自我のままの学生が、かなり見受けられることである。

こうした自我の未成熟な傾向を、講義で是正することは不可能に近いのであるが、それでも、保育者として自分の自我の様相を見つめる機会を与えたい。そして、自我の形成に関して、単に心理学的な面からだけでなく、キリスト教の信仰から検討する機会としたい、と思った。

そこで、保育職論においては、最後に「保育者と建学の精神」について講義することにした。

そのために、建学の精神について、学生がどの程度のことを知っており、どのように受け取っているのか、その実態を把握しておきたい。そして、少しでも学生の実態に即した授業ができるような資料を得たい、と考えた。

そこで、本研究では、本学の建学の精神「愛をもって仕えよ」を、学生が聖書の文脈、すなわちキリスト教の文脈で理解しているかどうか、を中心に、多方面から探索的に調査することにした。

方　法

(1) 調査票の作成

専攻科保育専攻の学生たちにも相談して、以下のような項目から、調査票を作成した。

①建学の精神を知っているか

- 日本語と英語で、建学の精神を書いてもらう。
- 建学の精神の出典について質問する。(難しいようなので、配列を後のほうにした。)

②建学の精神の実践について

- 保育者として建学の精神を実践する、とはどういうことか、短文の自由記述を求めた。記述欄を5枠設けた。
- 学生生活のなかで建学の精神を実践する、とはどういうことか、短文の自由記述を求めた。記述欄は5枠。(学生は「学生生活のなかで」のほうが書きにくい、というので、こちらを後にした。)

③本学における建学の精神の実状について

- 建学の精神が現れている、生きている、と思うことについて、短文の自由記述を求めた。記述欄は3枠。
- 建学の精神に反する、違う、と思うことについて、短文の自由記述を求めた。記述欄は3枠。
- 建学の精神の実践状況について、学生、教員、事務職員、私について、評定を求めた。
- 建学の精神の教育状況について、評定を求めた。

④建学の精神のイメージについて

- 建学の精神のイメージについて、形容詞対を25項目用意して、7段階評定を求めた。

以上の項目を盛り込んだ調査票は、末尾に添付した。

(2) 調査の実施

①調査対象：保育科2年生保育職論受講者、176名。

②調査時期：2001年11月。

③実　　施：授業時に実施。無記名。教示は保育専攻学生墨が担当。

結　果

(1) 建学の精神を知っているか

建学の精神について、日本語と英語で記述させた結果を纏めたのが、表1である。

表1　建学の精神を書きなさい　N=176

回　　答	%
愛をもって仕えよ	54
愛をもって互いに仕えよなど	26
無回答	17
全く違う	3
BY LOVE SERVE	45
BY LOVE SAVE など	43
全く違う	11
無回答	1

これをみると、日本語の場合、「愛を持って仕えよ」は、54%であるが、「愛を持って互いに仕えよなど」が26%あり、合わせると80%が知っている。

英語の場合も、正解は45%であるが、SERVEの綴りの誤りも含めれば、88%がだいたい知っていることになる。

次に、聖書のどこから出ているか、という問いに対する回答を纏めたのが、表2である。

表2　聖書のどこから　N=176

回　　答	%
新約聖書	26
旧約聖書	31
無回答	43
ガラテヤの信徒への手紙	0
マタイ、ルカなど	11
無回答	89

これをみると、新約聖書としたのが26%にすぎず、ガラテヤの信徒の手紙は皆無であった。

(2) 建学の精神の実践の評定

本学の構成員が、それぞれ建学の精神を実践していると思うか、について5段階評定を求めた

が、それを3段階に纏めて、「思う」の選択率の高い順に並べたのが表3の上側である。

表3　建学の精神を実践しているかなど　N=176

項　目	選択率（%）		
	思わない	?	思う
2. 先生たちは実践している。	5	25	70
1. 学生たちは実践している。	7	37	56
3. 事務の人たちは実践している。	17	40	43
4. 私は実践している。	13	46	41
5. 建学の精神についてよく教育している。	18	33	49
6. 建学の精神について話し合う機会が多い。	54	31	15

表4「愛をもって仕えよ」のイメージ　N=176

番号	項　目	選択率（%）			項　目
		左側	?	右側	
20	消極的	5	9	86	積極的
7	狭い	8	7	85	広い
3	暗い	10	9	81	明るい
12	負担である	10	13	78	当たり前である
17	強制的	14	10	76	自発的
19	一方的	18	7	75	相互的
2	親しみにくい	22	3	75	親しみやすい
11	子どもっぽい	4	22	74	大人っぽい
9	ほど遠い	21	7	72	身近な
23	現実的	19	10	71	理想的
13	単独行動	11	18	71	集団行動
16	束縛	17	14	70	自由
18	依存的	14	17	69	自立的
14	自己犠牲	16	16	68	自己実現
22	具体的	19	13	68	抽象的
8	ストレス	15	18	67	リラックス
5	しんどい	11	31	57	楽しい
6	かたくなった	31	12	57	のびのびした
10	たてまえ	32	14	54	ほんね
1	むずかしい	46	4	50	やさしい
4	つまらない	11	39	49	面白い
15	努力	53	22	25	才能（天性）
21	日常的	85	7	9	行事的
24	女性的	78	21	1	男性的
25	母性的	90	10	0	父性的

これをみると、「先生たち」は実践していると思うのが70%でかなり高い。次いで、「学生たち」が56%、「事務の人たち」が43%である。「私は」については「？（どちらともいえない）」が46%で、「思う」よりも多い。

また、「思わない」という回答は、どの項目も比較的少ない。「事務の人たち」の17%が最も大きい。

次に、表3の下側をみると、「建学の精神についてよく教育している」と思うのは、49%と半数である。「話し合う機会が多い」は、54%が思わないとしている。

(3) 建学の精神のイメージ

建学の精神のイメージについて7段階で評定されたものを、左側、?(どちらでもない)、右側の選択率に纏めて、右側の選択率の順番に並べたのが表4である。

選択率は右側のほうが高い項目が多かった。「消極的―積極的」のように、右側のほうが常識的によいイメージの項目は、よいイメージが選択されている。「むずかしい―やさしい」では、ほぼ半々に分かれている。

最後の3項目では、「日常的」「女性的」「母性的」のほうが高く選択されている。

おおまかに見て、建学の精神に対して、よいイメージ、好意的イメージをもっている。また、日常的、女性的、母性的なものと思っている。

(4) 自由記述の分類

以下の分析は、「建学の精神を実践する」「建学の精神が生きている、建学の精神に反する」について、自由記述を求めて、それを分類したものである。

回答として記述したすべての文章を入力した。総記述数は1,536であった。これらの記述を保育専攻2年生3名が、それぞれ独自に分類を試みた。それをみると、共通部分もあったが、分類者によって、かなり違う面もあった。特に、1つの文章にいくつかのキーワードが含まれる場合、どこを主にして分類するかによって、かなり分類が異なってくるのである。

これら、学生の分類を参考にしながら、私なりにイメージを描き、意味の似た表現を集める、と

いう形で分類した。当初、これらの記述が聖書の文脈に沿っているかどうか、という問題意識であったが、ほとんどが聖書とは無関係な記述なので、そうした視点で分析することは無理であった。

（5）建学の精神を実践する

①保育者と学生生活

調査票作成の段階で、学生たちは、学生生活のなかでの実践よりも、保育者としての実践のほうが書きやすい、ということであった。「保育者として実践」と「学生生活のなかで実践」の自由記述は、それぞれ5枠の記入欄を設けたのであるが、実際の記述数を調べて、その平均、総数、回答率を示したのが、表5である。

表5　「実践」の記述数　N=176

	平均	SD	総数	回答率
保育者として、実践する	3.2	1.2	565	64%
学生生活のなかで、実践する	2.6	1.2	468	53%

表5をみると、「保育者として実践」のほうが「学生生活のなかで実践」よりも記述数が多い。予想通りであった。

②保育者としての実践

建学の精神を保育者として実践することについての自由記述を、実践の対象に基づいて分類したのが、表6であり、それぞれについて、さらに分類したものが表7である。

表6をみると、「子どもに関すること」が58%で最も多く、次いで「自分に関すること」が多い。「人に関すること」には、「子ども」と「自分」以外の「人」に関するものを入れた。

表6　保育者として実践

分　類	f	%
子どもに関すること	329	58
自分に関すること	134	24
人に関すること	72	13
その他	30	5
計	564	100

表7　保育者として実践の内容

分　類	f	%
子どもに関すること		
愛する・愛情を注ぐ	109	33
理解する・受け容れる	70	21
一人ひとり大切にする	37	11
平等に見る・差別しない	23	7
叱る・注意する	14	4
愛し合う・一緒に成長する	9	3
その他	66	20
小　計	328	100
自分に関すること		
人間的向上に努力する	69	51
保育者として努力する	35	26
いつも挨拶や笑顔を	20	15
保育の勉強	10	7
小　計	134	100
人に関すること		
すべての人、相手に対して	47	65
保護者に対して	15	21
職員に対して	10	14
小　計	72	100
その他		
動植物や物に対して	21	70
人を助けること	7	23
キリスト教のこと	2	7
小　計	30	100

a．子どもに関すること

「子どもに関すること」のうち「愛する・愛情を注ぐ」が最も多いが、これには「子どもを平等に愛する」「子どもを一人一人愛する」など、他のカテゴリーに入るものも、愛、愛情を優先して入れた。

「理解する・受け容れる」には、子どもの気持ちを分かる、子どもの話を聞く、子どものことを考える、なども入っている。「一人一人大切にする」「平等に見る」は、この見出しとほぼ同じ内容である。「叱る・注意する」は、悪いことをしたときは叱る、善悪を教える、危険なことを伝える、などである。

「愛し合う・一緒に成長する」は、子どもから愛されるように子どもを愛する、一緒に生活して愛し合う、など、子どもから愛されることを含んだ

記述を入れた。「その他」には、援助する、温かい目で見守る、支える、信じる、幸せを願う、楽しく遊ぶ、など様々な記述があった。

子どもに関することを通じて見ると、教える、指導する、といった内容は皆無であった。

b．自分に関すること

「自分に関すること」のうち、「人間的向上に努力する」には、感謝の気持ち、温かい心、思いやりの心、優しい心、素直な心を持つ、精神を鍛える、自分を大切にする、自分を理解する、積極的に行う、親身になる、広い視野に立つ、社会的秩序を守るなど、種々雑多なものが含まれている。子ども、人、保護者など、特定の対象についての記述ではなく、自分の努力目標のようなものを纏めた。

「保育者として努力する」には、子どもが主体となる保育をする、保育者が手本となるよう心がける、心で保育する、子どもに学ぶ姿勢で保育するなど、保育者としての心構え、努力などに関する記述を入れた。「いつも挨拶や笑顔」は、上の項目に入れてもよいが、多かったので別にした。「保育の勉強」は、歌や遊びの勉強をする、保育者としてしっかり勉強するなどである。

c．人に関すること

「すべての人に対して、相手に対して」には、相手に対して、人に対して、という言葉で始まったり、あるいは特に対象を特定しない、思いやりの心を持つ、愛情を持って接する、優しい気持ちを持つ、などを入れた。

「保護者に対して」は、保護者にも愛をもって接する、保護者の立場に立って思いやりの心を持つ、などである。「職員に対して」は、職員間の助け合い、協力などである。

d．その他

「動植物に対して」は、動植物なども愛する、世話をするなど、人間以外のものを愛する、と言った記述である。「人を助ける」は、困った人を助けるなどである。「キリスト教のこと」は、キリストの教えに添った指導をする、イエス様のことを教える、の2つだけであった。

「保育者として実践」の回答を見てくると、「愛をもって仕えよ」のおうむ返しに、愛、愛情という言葉の記述が目立った。また、「仕える」ということから、子どものため、相手のために、私が尽くす、と言う意味の記述が多かった。しかし、その内容のほとんどが、「建学の精神を保育者として実践すること」という問いの代わりに、「保育者として実践すべきこと」という問いでも、同じような記述になると予想されるものであった。

③学生生活のなかで実践する

建学の精神を学生生活のなかで実践する、についての回答を大きく分類したのが、表8である。

表8　学生生活のなかで実践

分　類	f	%
友人関係	124	26
人間関係	113	24
マナー等	98	21
勉強．努力	83	18
その他	50	11
計	468	100

「友人関係」は、学生同士の行動を入れて、「人間関係」には、人には優しくなど、友達と特定していないもの、教員や事務職員に対するもの、などを入れた。この2つで、学生生活のなかで実践の約半分を占める。

次に、それぞれについて、さらに分類したものが表9である。

a．友人関係

「思いやる・大切に・愛する」は、友達を愛する、思いやる、大切にする、親切にする、優しくする、などである。「助け合う・協力する」は、友達同士、クラス、先輩後輩などの協力、助け合いが含まれる。「仲良く・深める」は、友達と仲良くする、友人関係を深めるなどである。「理解する・受け容れる」には、分かり合う、話を聞く、相談し合う、なども入れた。

b．人間関係

これは、友人関係とほぼ同じ内容のもので、「友人」を「相手」「先生」「人」などの対象に置き換えたものである。「交流を深める」には、先生との交流、あるいは先生と友達と仲良く、などが含まれる。

c．マナー等

「挨拶・笑顔・礼儀」では、特に挨拶が多かった。「迷惑・嫌なことをしない」には、迷惑、嫌がるこ

表9　学生生活のなかで実践の内容

分　類	f	%
友人関係		
思いやる・大切に・愛する	45	36
助け合う・協力する	36	29
仲良く・深める	22	18
理解する・受け容れる	21	17
小　計	124	100
人間関係		
思いやる・大切に・愛する	44	39
理解する・受け容れる	35	31
交流を深める	17	15
助け合う・協力する	13	12
その他	4	4
小　計	113	100
マナー等		
挨拶・笑顔・礼儀	41	42
迷惑・嫌なことしない	33	34
ごみの対応	17	17
感謝を忘れない	7	7
小　計	98	100
勉強・努力		
受講態度	28	34
勉強に励む	19	23
よい保育者になる勉強	18	22
いろいろなことに取り組む	18	22
小　計	83	100
その他		
礼拝に出る・聖書を読む	8	16
困った人を助ける	7	14
その他	35	70
小　計	50	100

とをしないなどのほか、周りを考えて行動する、進んで良いことをするなども入れた。「感謝を忘れない」には、一般的なことのほか、掃除のおばちゃんおじちゃんへの感謝、なども含まれる。

d．勉強・努力

「受講態度」は、授業を真剣に聞く、授業に意欲を持って出席する、先生から学ぶ、といった内容である。

「勉強に励む」は、直接授業のことでなく、一般的に勉強すること、「良い保育者になる勉強」は、良い保育者になるために勉強する、子どもの特徴について学ぶ、などである。「いろいろなことに取り組む」は、幅広く何事にも積極的に取り組む、一生懸命やるなどである。

e．その他

「礼拝に出る」「困っている人を助ける」は、この通りである。「その他」には分類しにくいものを入れた。

マナーも人間関係の手段と考えると、学生生活のなかで建学の精神を実践することの大部分は、人間関係を良くすること、と考えている。学校における生活時間の大半を占める授業や勉強に関することは、それほど多くなかった。

（6）本学における建学の精神の実状

①生きていることと反すること

「建学の精神が現れている、生きていると思うこと」と、「建学の精神に反する、違うと思うこと」について自由記述を求めた。記述数の平均、総数、回答率を纏めたのが、表10である。

表10　「生きている・反する」の記述数　N=176

	平均	SD	総数	回答率
現れている、生きている	2.0	0.8	359	68%
建学の精神に反する、違う	0.8	0.9	144	16%

これをみると、「現れている・生きている」のほうが記述数が多く、「反する・違う」の記述数はかなり少ない。

②建学の精神が生きていること

「現れている・生きている」について、分類したのが表11である。

表11　建学の精神が生きている

分　類	f	%
教職員・授業	127	35
学生同士の行動	102	28
行事・雰囲気	72	20
挨拶	58	16
計	359	100

このうち、「行事・雰囲気」と「挨拶」は、全学の雰囲気として纏めてもよかったが、その中でも挨拶が飛び抜けて多かったので、挨拶だけ別にした。したがって、教職員、学生、全学の雰囲気の3つに分かれている、と見てよい。それぞれをさらに分類したのが表12である。

表12　建学の精神が生きているの内容

分　類	f	%
教職員・授業		
親身に相談・アドバイス	41	32
親しみやすい・学生と仲良し	34	27
熱心に授業	27	21
事務職員が親身に考えてくれる	20	16
実習の指導	5	4
小　計	127	100
学生同士の行動		
仲がよい・親しみやすい	45	44
優しい・思いやりがある	24	24
協力・助け合う	20	20
同じ目標で努力	10	10
その他	3	3
小　計	102	100
行事・雰囲気		
行事で協力する	37	51
礼拝・宗教の時間	18	25
雰囲気がよい	17	24
小　計	72	100

a．教職員・授業

「親身に相談・アドバイス」では、先生方が気軽に相談にのってくれる、学生に真剣に向き合ってくれる、学生のことを考えてくれる、などである。「親しみやすい・学生と仲良し」には、標記の内容のほか、先生との距離が近い、学生の名前を覚えていてくれる、名前を呼んで呼びかけてくれる、などが含まれている。「授業に熱心」は、熱心に愛情を込めて教えてくださる、先生方の良い保育者になって欲しいと言う願いが届く、いろいろなことを精一杯教えてくれる、などである。「事務職員が親身に考えてくれる」には、先生方や事務の人、など教職員をあわせて記述しているものも入れた。職員の方にも親しみをもって接していただいている、就職、進路など、親身に考えてくれる、掃除のおばちゃんと気軽に話せる、などである。

b．学生同士の行動

「仲がよい・親しみやすい」は、クラス全員仲良くなれる、だれとでも親しみやすい、だれにでも声をかけやすい雰囲気である、などである。「優しい・思いやりがある」には、標記の内容のほか、いい人、親切、あたたかいなどもいれた。「協力・助け合う」には、標記のほか、相談にのってもらえる、話を聞いてくれる、などもいれた。「同じ目標で努力」は、みんなが保育者という目標に向かっている雰囲気に関することがあげられている。

c．行事・雰囲気

「行事で協力する」は、柳城祭などの行事で、クラス、全学で協力することがほとんどだが、ゼミ単位で掃除をすることなども入っている。「礼拝・宗教の時間」は、礼拝や宗教の時間があることがほとんどだが、礼拝によって自分を省みることができる、などもあった。「雰囲気」は、あたたかい、アットホーム、和やか、のびのびなどである。

以上、おおまかに記述をみてきたが、纏めてみると、建学の精神が生きている、と感じるのは、自分が教職員や他の学生に良くしてもらった、よい雰囲気に浸ることが出来た、と言うことが中心である。建学の精神の実践、と言う場合に、自分が子どものため、みんなのために尽くす、と書いているのと対照的である。

③建学の精神に反すること

建学の精神に反することを分類したのが表13であり、それをさらに分類したのが表14である。

表13　建学の精神に反する

分　類	f	%
マナーの悪さ	60	42
学生同士の行動	38	26
教職員の態度	37	26
その他	9	6
計	144	100

a．マナーの悪さ

最も多かったのが「マナーの悪さ」である。その内容は、表14にあるように、主としてゴミに関す

ることである。本学は、学内では禁酒禁煙になっているので「たばこを吸う」には、トイレでたばこを吸う、などがある。「派手な服装・悪い言葉使い」は、保育者にふさわしくない、との指摘である。

表14　建学の精神に反するの内容

分　類	f	%
マナーの悪さ		
ごみを捨てる	29	48
たばこを吸う	7	12
挨拶をしない	3	5
盗難がある	4	7
受講態度が悪い	5	8
派手な服装・悪い言葉使い	7	12
その他	5	8
小　計	60	100
学生同士の行動		
いじめ・仲悪い	21	55
自分勝手	14	37
考えが狭い	3	8
小　計	38	100
教職員の態度		
教員の態度・授業	31	84
事務職員の態度	6	16
小　計	37	100
その他		
礼拝の強制	3	
学費が高い	2	
その他	4	
小　計	9	

b．学生同士の行動

「いじめ・仲が悪い」では、いじめ、うわべだけのつきあい、悪口、派閥、仲が悪いなど、友人関係について、あれこれあげている。「自分勝手」では、自分勝手、自分中心、思いやりがない人がいるなどのほか、ピアノ室の場所取りなどもある。「考えが狭い」は、保育以外の考えの人と関わりにくい、考えが偏るなどである。

c．教職員の態度

「教員の態度・授業」では、ピアノなどの授業で厳しいことを言われた、できる子を中心にする、ひいきがある、冷たい、言動が乱暴で優しさがない、など教員の授業態度に関するもののほか、授業で何を伝えようとするのか分からないのがある、などである。また、先生方の言っていることが統一されていない、先生方により授業の中身がちがう、などもある。「事務職員の態度」では、対応が冷たい、自分の非を認めず学生を責める、そっけないなどである。

d．その他

「礼拝の強制」では、礼拝を強制したら愛はなくなると思う、などがあった。「学費が高い」では、学費の高い割には設備が整っていない、というのがあった。

建学の精神に反すること、にあげられている記述は、建学の精神が生きていることの裏返しで、自分が嫌な思いをした、厳しくされた、冷たくされた、と言うことである。

考　察

(1)「愛をもって仕えよ」の一人歩き

表1をみると、建学の精神について、日本語、英語とも、多少の誤記を大目に見れば、80%が正答である。しかし、表2の聖書のどこから出ているかについては、新約聖書との回答が26%あるが、ガラテヤの信徒への手紙、と書いたものは皆無である。建学の精神はなんとなく知っているが、それが聖書の言葉であることを、意識していないのである。

ところで、建学の精神は「愛をもって仕えよ」となっていて、聖書の文語訳「愛をもって互いに事えよ」、新共同訳「愛によって互いに仕えなさい」のいずれにも忠実ではない。

本学の「礼拝式文・祈祷文」には、「表紙裏」に新共同訳のガラテヤ信徒への手紙5章13節が、「礼拝の聖語」にその後半「愛によって互いに仕えなさい(ガラテヤ　5.13)」が載っているので、「互いに」などが入った回答が26%あったのだと思う。まだ、こうした聖句を経験していない、2002年度の新入学生に建学の精神を書かせたところ、正答率は81%で、「互いに」が入った例はなかった。

建学の精神の出典である、新約聖書ガラテヤの信徒への手紙5章13節について、手元にある日本語訳を並べてみよう。

・兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によって互いに仕えなさい。(新共同訳)
・兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与えられん為なり。ただ其の自由を肉に従ふ機会となさず、反って愛をもって互いに事えよ。(文語訳)
・兄弟たちよ、あなたたちは自由のために召された。ただその自由を、肉への刺激として用いてはならない。むしろ愛によって互いに奴隷となれ。(バルバロ訳)
・まことにきみたちは自由人たるべく召されたのだ、兄弟たちよ！ ただしその自由を肉の跳梁のための足がかりとはせず、むしろ愛の軛を負って互いに仕えたまえ。(NTD新約聖書注解)

新共同訳では、5章13節の聖句は、「キリスト者の自由」と言う見出しがついた段落にあり、その文脈のなかで意味がある言葉である。ここから一部分をとって常識的に使うことは、聖書の意味から離れる危険がある。

創立者が、どんな意味を込めて、「互いに」を抜いたこの言葉を建学の精神としたのか、それとも、創立者は「互いに」を入れていたのが、どこかで抜けてしまったのか、わからない。

ここの「仕える」は、奉仕する、サービスするという意味ではない。文語訳では「事える」、バルバロ訳では「奴隷となれ」となっており、奴隷として仕える、と言う意味である。

この13節は、5章1節に「この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださったのです。だから、しっかりしなさい。奴隷の軛に二度とつながれてはなりません。」とあるのを受けている。これについて注解書は次のように述べている。

ところで、この両節後半の対応関係は、「律法」という「奴隷の軛」からの「自由」を維持するには、「愛による奉仕＝隣人愛」という新たな「奴隷の軛」を引き受けることが必要である、という考えによるものであるゆえに、逆説的な対応関係である。(新共同訳新約聖書注解Ⅱ　p.199)

この逆説は、言葉としては難解な表現になるが、内容から見ると、信仰に生きる人、もっと常識的に言えば、自我の成熟している人は、日常生活において、ごく自然に営んでいることなのである。

したがって、「愛をもって仕えよ」の言葉は、こうした逆説的な「キリスト者の自由」が分かって、その文脈のなかに位置づけてこそ、聖書のメッセージとなるのである。

「愛をもって仕えよ」という言葉を、80%の学生が知っていながら、それを聖書に結びつけていない。当然、聖書の文脈もほとんど知らない。建学の精神「愛をもって仕えよ」は、聖書を離れて一人歩きしているのである。

(2) 母性的で未成熟な愛

建学の精神で使われている「愛」は、聖書の愛すなわちアガペーである。それは、神に愛されているから、人も互いに愛し合う、ということであり、人だけの営みではない。

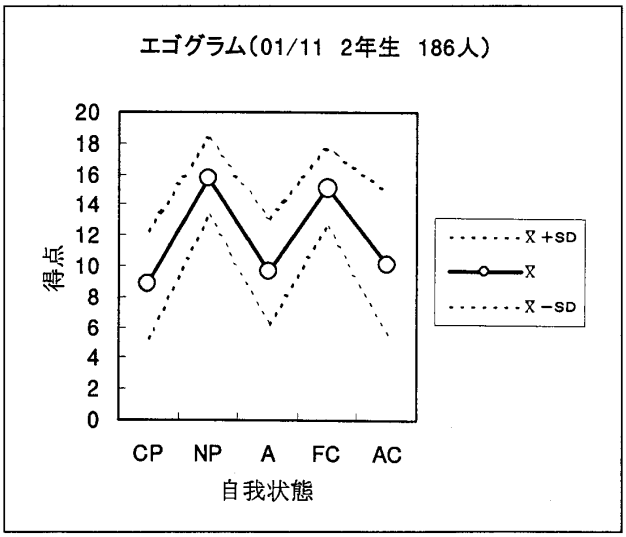
「保育者として実践」であげられた、子どもを愛する、子どもに愛情を注ぐ、子どもの気持ちを理解する、一人ひとりを大切にする、などの記述、および「学生生活のなかで実践」にあげられた友達を思いやる、大切にする、愛する、助け合う、仲良くする、などの記述をみると、確かに相手のために尽くすことを述べているのだが、それは、自分が頑張ってやることであり、神に愛されているから、という視点は全くない。

ここで学生たちが使っている愛と言う言葉は、アガペーではなく母性的な愛である。というのは、表4のイメージをみると、母性的90%、日常的85%、女性的78%となっているからである。父なる神という表現もあるから、この愛が、神の愛すなわちアガペーのイメージならば、これほど母性的、女性的にはならないと思う。

同じ学生を対象に、エゴグラムを実施して、平均値のグラフを描いたのが、図である。

これを見ると、本学学生のNP(養育的親)の得点はかなり高い。いわゆる世話好きで母性的といえよう。

この図から、学生は、CP(批判的親)、A(大人)、AP(順応な子ども)が低く、FC(自由な子ども)



が高いことがわかる。つまり、世話好きでのびのびしているが、自我が未成熟で幼稚なのだ。

このことは、「建学の精神が生きていること」「建学の精神に反すること」の記述を見ても、よく分かる。特に教職員に関しての記述を見ると、自分が「愛をもって私に仕えてくれた」と感じることが「建学の精神が生きている」事であり、自分が「愛をもって私に仕えてくれない」と感じることが「建学の精神に反すること」である。それは、きわめて情緒的で幼稚な受け取り方である。

「建学の精神を実践する」と言うときには、子どものため、友達のため、人のために自分がすることを沢山並べておきながら、「生きている・反する」と言うことになると、自分がしてもらうことが中心である。

自分が本学の雰囲気に触発されて、他者のために尽くした、あるいは尽くす喜びを味わった、などを意味する記述は、ほとんど無かった。

(3) 相互作用に気づかない愛

学生たちの記述は、私が子どもを愛する、私が子どもの気持ちを分かる、というように、私が子どもたちに一方通行的に尽くす、と言う視点が強かった。

かつて、学生の保育者のイメージに関する自由記述を分析して、子どもの心よりも、「自分が保育者としてうまく振る舞えるかどうか」が最大の関心事である、と指摘した(岩井 2000)。今回の記述を見ても、同じような感想である。相手を愛する、と書いても、相手との相互作用から愛するのではなく、ひたすら私が相手を愛する、という調子である。

表7の「子どもに関すること」の下位分類に「愛し合う・一緒に成長する」があり、ここでは若干子どもとの相互の関わりに触れている。しかし、「子どもを世話してあげるのではなく、一緒に生活して愛し合う」「自分が愛されるように、子どもを愛する」などであって、「子どもが愛してくれるから、私も子どもを愛する」のように、「私が愛されている」ことを前提にした発想は、ほとんどなかった。

学生たちは、「神に愛されているから子どもを愛する」ことが実感できないのかもしれない。しかし、神を抜きにしても、私はみんなの愛に支えられて生きているのだから、私も自分のためだけではない生活をしよう、子どもに愛されているから子どもを愛そう、ぐらいのことは気づいてもよい。

「愛をもって互いに仕えなさい」の「互いに」の原語は、二者の間にも多数の間にも用いられる用語である。この「互いに」が抜けてしまったためか、学生が使う愛と言う言葉から、保育者として、人間として、最も重要な相互作用の視点が欠けてしまった。それが愛と言えるだろうか。

(4) 情緒的表面的な「愛をもって仕えよ」

「保育者として実践」の記述を見ると、愛する、理解する、受け容れる、大切にする、平等にするなど、主として人間関係の潤滑油的な用語が出てくることが多かった。言い換えると、情緒的表面的に保育者が子どもにソフトムードで接していく、と言う内容が多かった。保育者が、保育者の職務を全うすること、すなわち子どもを育てることが、愛をもって仕えることになる、といった記述は、それほど見られなかった。

「学生生活のなかで実践」の場合、大部分は和やかムードの人間関係のことで、学生生活の中心である授業や勉強のことは、それほど多くはない。

「建学の精神が生きている」「建学の精神に反する」となると、この傾向はもっと強い。この質問が、保育者養成の教育をきちんと受けることが出来たかどうか、という学生として本質的な事柄と結びつかず、自分が人間関係で気分的に良い思い

をしたかどうかだけに、結びついている。

これまで、授業評価について分析してみたが、学生の評定は、授業方法や授業内容について質問しても、その本質的なところに反応しないで、教師が好きか嫌いか、ということに反応をしている傾向があった(岩井 1998, 1999)。どうも、学生の反応は情緒的なのだ。

「愛をもって互いに仕えよ」ということは、優しい、思いやりがある、といったお涙頂戴的な情緒の問題ではなく、もっと全人格的な問題なのである。保育者としての実践という視点から見れば、保育者として、職務を全うするかどうか、真に子どもを育てているかどうか、の問題である。

「保育者として実践」の記述を読んでいて、教育する、指導するといった内容は、「子どもに関すること」で「叱る・注意する」と分類されたものぐらいである。「教えるのではなくて、援助する」「子どもの主体性を大事にする」ということが誤解され、流布されたためか、どうも保育界、教育界で、教えるべきことを教え、しつけるべきことをしつけていない。本学の学生を見ても、高校までに教えられ、しつけられるべき基本が身についておらず、幼児のような学生が目に付く。

保育者の職務の目標は、子どもの自発性を尊重する方法をとるにせよ、子どもをしっかりと教え、しつけ、育てることである。学生たちの記述の大部分は、目標に達するための手段に過ぎない。なにか、保育の目標が曖昧模糊としていて、目標と手段を混同し、手段を目標と勘違いをしているのではないか。

(5) 肯定的に回答する傾向

聖書の文脈と関連づけると、建学の精神の理解にかなり問題があることを見てきた。ごく常識的に見れば、学生たちは、建学の精神を肯定的にみて、本学に建学の精神が生きている、と見ている。

表4の建学の精神のイメージを見ると、かなりの項目で右側の選択率が大きい。多くの項目では形容詞対の右側のほうがプラスの価値をもつ。したがって、建学の精神について、プラスのイメージ、肯定的なイメージをもっていると言えよう。

表3の「建学の精神を実践しているか」では、「先生たちは実践している」は70%が「思う」である。「学生たちは実践している」は56%「思う」なのに、「私は実践している」は41%が「思う」で「?」が46%というのは、面白い数量である。学生の受け取る「実践」の意味が、すでに指摘したように「愛をもって仕えてもらう」ことが中心なので、自分についてはこうした結果になったと思う。「事務の人たちは実践している」は、「思う」43%、「?」40%、「思わない」17%である。事務職員に対するこうした評定は、教員ほど接触がないこと、事務手続きはルールで切る必要があること、なども影響している。

しかし、表3全体としてみれば、「建学の精神を実践している」について肯定が多く、否定は少ない。

表10をみると、「建学の精神が生きている」の記述数のほうが「建学の精神に反する」の記述数よりもはるかに多い。

このように、本学の教育に関して、学生が肯定的な回答をする傾向は、今回の調査だけでなく、これまでの調査でも見られた傾向である。

それは、本学の教育がそれなりに学生に評価されていることを示しているが、それだけではなく、学生側の問題でもある。

ひとつは、学力や文章力の不足をごまかすために、試験答案でもアンケートでも、本当のことは分からなくても、先生が気に入りそうなことを書いておく、ということが習い性となっている、と思われる。もう一つは、学生自身が素直で、ものごとを単純に肯定的に見る資質を備えているためである。

いずれにせよ、保育者としてこうした資質は、順風のときはそれなりの良さを発揮するが、逆風を乗り切るには、力不足になると思う。

討　論

(1) 建学の精神を生かすために

シィート・L.K. (2002) は、キリスト教学校教育同盟夏期研究集会の主題講演で、日本のキリスト教学校創立の背景として、啓蒙主義の思想、植民地主義の活動、キリスト教界の勝利主義の態度、をあげている。西洋式の幼稚園教育がなかった名古屋の地において、本学が創立された頃の状

況は、この3つのすべてに当てはまるといってよいだろう。そうした状況のもとで、「愛をもって仕えよ」の建学の精神が提唱されたのである。

シィートは、さらに、日本のキリスト教学校の現況について、①ポストクリスチャンの状態、②ポストコロニアルの状況、③ポストモダンの状況、を指摘している。本学の現況を大まかに眺めてみると、①本学のキリスト教主義に基づく保育者養成あるいは幼児教育が、非キリスト教系のそれに対して優位に立つ状況ではない、②宣教師の教員はいない、③100年余り続いた、学校は勉強の場であるという、近代学校制度を否定するような学生が入学してくる状況、という点で、3つとも当てはまるようである。

平川（2002）は、新島襄に関する小論で、建学の精神について、次のように述べている。

今日の日本の学校関係者で「建学の精神」をいいたてる人の多くは、自己の権益を守ろうとする人に多い。キリスト教系の大学で人事にクリスチャン・コードなるものを持出す傾向もそれである。ちなみにChristian codeは和製英語であるらしい。思想・信教の自由を尊ぶべき国庫の補助金を受ける大学では、口にしてはならない要件であろう。そのような傾向が自己権益の維持と関係していることの証拠に、「建学の精神」なるものを具体的に説明できない人が大部分である。

それはいってみれば今日の中国で共産党幹部が新中国建設に果たした党の役割を強調し、「井戸の水を飲む人は、井戸を掘ってくれた人の恩を忘れるべきではない」と訓話を垂れるのと同然である。（中略）しかしソ連邦解体後の今日、一党支配の有用性を説得的に語ることは難しい。それで説明抜きで「建国の精神」のありがたさをやみくもに説教するのである。

それと似た心理は日本の大学で「建学の精神」を説く人の間でも見られる。ミッション系の学校も、そのようなまやかしと残念ながら無縁ではないのではあるまいか。（文　68号　2002年　p.9）

この批判の内容や論理は偏狭で、必ずしも賛成できない。しかし、建学の精神に関する他山の石として学ぶべきこともある。

このように、本学の内外の状況は、創立の頃の状況とは、かなり違っている。それなのに、本学における建学の精神は、これまで見てきたように、「愛をもって仕えよ」という言葉が一人歩きして、常識的に使われているに過ぎない。これでは、建学の精神をいいたてるのは自己権益の維持だけだ、あるいは「建学の精神」なるものを具体的に説明できない人が大部分である、という批判に応えられない。

そこで、聖書に立ち帰って、保育者養成と建学の精神について、保育者の日常的行動から検討しておこう。

（2）「よい保育者」の奴隷から自由に

保育者をめざして入学してきた真面目な学生たちは、よい保育者、立派な保育者をめざしている。しかし、よい保育者を自分で決める自己評価力のある学生は少ない。

「建学の精神に反する」として、「先生たちの統一がとれていない」「先生たちの言っていることが違う」というのがあったが、いろいろな先生の保育観を自分なりにまとめる力量がないことを表している。これでは、自分なりに「よい保育者」像を描くことはできない。

自分で「よい保育者」像を描く力がなければ「よい保育者」を自己評価できない。結果として、他者の評価に頼ることになる。幼い頃から、学習の内容よりも学習の評価を気にして勉強してきた学生たちは、こうした傾向が特に強い。

そうなると、「よい保育者」をめざすことは、絶えず他者の目を気にすることにつながり、他者からよく見られることに心が奪われて、心身共に固くなり、肝心の子どもの心が見えなくなる。

子どもを育てるために「よい保育者」をめざすことが、かえって子どもを育てない、という皮肉な結果になる。これを聖書的に言えば、自分の力だけで「よい保育者」をめざすと、いつの間にか、「よい保育者」が律法となって、保育者が律法の奴隷になってしまうのである。

イエス・キリストは、「よい保育者」の奴隷となっている保育者を解放して、自由を与えてくださる。すなわち、保育者として、成果があげられなくても、失敗しても、よい評価が得られなく

ても、どじでもよい、保育者のありのままの存在を認め、保育者を見捨てないで、「私がすべてを分かっているから、他者の目を気にしなくてもいいよ、自分の力でできることやればいいよ」と支えてくださるのだ。

イエスが支えてくださるのだから、子どもが育つためならば、園長、職員、保護者、あるいは子どもたちからも、「よい保育者」と認められなくてもいいのだ。保育者がめざすことは、「子どもが育つ」ことであって、自分がよい保育者になることではない。だから、本当に子どもを育てる保育者になるためには、「よい保育者」になることを捨てることである。そうすれば、保育者は自由を得ることができる。

(3) 子どもの奴隷となって自由を

聖書は、この得られた自由を維持するためには、保育者は、愛をもって、子どもの奴隷となりなさい、と言っている。すなわち、保育者は、子どものために自分は不自由になりなさい、そうすれば保育者として自由が得られる、と言っているのだ。

子どもの奴隷となることは、子どもの言いなりになることではない。保育者が、自分を捨てて、子どもが育つことに、すべてをかけることである。

本年度前期、専攻科保育専攻の学生たちに、街角でもどこでもいいから、子どもを見つけて、毎週、子どもの行動の観察記録を作成して発表する、という授業を試みた。そこで気がついたのだが、最初のうちは、子どもと一緒にいる親の様子ばかり書いて、子どもの行動そのものを観察できない学生が多かった。つまり、子どもに働きかける側ばかり気になって、子どもの行動自体に興味関心がなかったのである。

考えてみれば、保育者として、子どもに働きかけるにはどう振る舞ったらよいかは、いろいろな面から学ぶ機会はあるが、子どもの行動そのものを観察することは、学ぶ機会がないのかもしれない。観察記録の回数を重ねて、授業の最終回になると、今まで関心がなかったけれど、最近は、街角で子どもを見かけると、子どもの動きが面白くて、見とれてしまう、といった感想がでてきた。

学生たちの様子を見ていると、子どもの行動を観察して、子どもの心を読みとることは、苦手のようである。たとえば、実習で「声かけ」をどうしたらよいか困った、「声かけ」の仕方を知りたいなどの話をよく聞くが、そんな固定的声かけでは、声かけにならない。子どもをよく見ていれば、どんな声をかけて欲しいのか、声をかけて欲しくないのか、その時々、子どもの顔にちゃんと書いてあるはずだ。それが読めないだけだ。

自由記述で、子どもを愛する、理解する、子どもの側に立って、などと立派なことを書いているが、子どもを観察する力がなくて、こんなことが、できるはずがない。それは、実現の見通しのない建前を書いているだけにすぎない。それが証拠に、建学の精神の実践で、立派なことを並べている学生が、本学の実態については、自分の利害を中心に回答しているではないか。

ところで、奴隷は、業績や成績によって給与や報酬を得る身分ではない。主人のために尽くすだけでいいのだ。だから、子どもの奴隷となることは、子どもによい結果や成果などの見返りを求めないで、ひたすら子どものために尽くすことである。

言い換えると、子どもの奴隷となることは、子どもの心を見抜いて、子どもが育つために今何が必要か、保育者として判断し、保育者自身の責任と能力で、子どもに必要なことを実行することである。そして、その成果や評価は求めない。神様にお任せするのである。

それは、私がこんなに一生懸命やったのだから子どもはそれに応えて欲しい、それなりの成果をあげて欲しい、という気持ちを捨てることだ。これができれば、自由が得られるのである。

子どもの心が見抜けないで、自分の責任と能力で、子どものために実行することができず、言われたことだけをやって、結果や評価ばかり気にしているようでは、自由は得られない。

(4) 愛による逆説の実現

建学の精神を保育者に当てはめてみると、「よい保育者」の奴隷から解放されて自由になること、この自由を維持するためには、子どもの奴隷となることによって自由を得ること、と述べてきた。

ただし、これは逆説であるから、誤解しないで欲しい。保育者を志望する者は、よい保育者を目指して厳しい勉強が必要だ。よい保育者としての資質を最大限向上させて、しかもよい保育者を捨てるのだ。子どもの奴隷となることも、保育者として精一杯保育をして、その成果という見返りを捨てることである。

この逆説は、自我が未成熟では実現できない。自分の力だけで頑張っても、実現できない。それは、神に愛されているから、人も互いに愛し合うことによって、実現するのである。そして、この逆説を体験するとき、自我も成熟するのである。

この逆説の真理を表現しているのが、ガラテヤ信徒への手紙5章13節である。そして、この逆説の真理を伝えることが、建学の精神「愛をもって（互いに）仕えよ」の使命である。

表3の下段、「建学の精神についてよく教育している」で、49%が「思う」と答えている。そのわりには、建学の精神の意味が伝わっていない。また、「建学の精神について話し合う機会が多い」に対しては、15%が「思う」と答えているにすぎない。

よい保育者の奴隷から自由になって、子どもの奴隷となる、ということは、われわれ教職員にも当てはまる。よい教職員の奴隷から自由になって、学生の奴隷となって自由を得ているか、問われることである。

教職員も学生も、聖書から離れて一人歩きしている建学の精神を、もう一度聖書に立ち帰って学び、真に建学の精神の生きた学校にしたいものである。

付記：調査の企画、実施、集計整理にあたって、専攻科保育専攻の2001年度学生墨さおり、湯浅絵津子、2002年度学生粟島実穂、伊藤栄里子、伊藤はなよ、不破美穂子の協力を得た。記して感謝したい。

文　献

平川祐弘　2002　アメリカに感化された人　文　68　公文教育研究会.

岩井勇児　1998　保育科・幼児教育科学生による授業評価―無記名・記名、自己評定・他者評定、成績等からの検討―　*名古屋柳城短期大学研究紀要*, 20, 71-89.

岩井勇児　1999　保育科学生のクラスの雰囲気と授業評価　*名古屋柳城短期大学研究紀要*, 21, 63-73.

岩井勇児　2000　保育科学生の保育者観の形成　*名古屋柳城短期大学研究紀要*, 22, 137-149.

岩井勇児　2001　保育科学生の保育者観の形成（続報）　*名古屋柳城短期大学研究紀要*, 23, 183-194.

シィート・L.K.　2002.9　共に重荷を担う　キリスト教学校教育　462号　キリスト教学校教育同盟.

新約聖書（フェデリコ・バルバロ訳）1975　講談社

聖書（新共同訳）1991　日本聖書協会

文語舊新訳聖書　1982　日本聖書協会

NTD新約聖書注解8　パウロ小書簡　1979 ATD・NTD聖書注解刊行会

新共同訳新約聖書注解Ⅱ　1991　日本基督教団出版局

—資料—

調査BLS01　2001年11月16日調査実施　　2年　　組　　名古屋柳城短期大学専攻科保育専攻

この調査は、本学の建学の精神について、学生のみなさんが、どのようなことを考えているのか、知るためのものです。また、保育専攻学生の研究の１つでもあります。回答には正しいとか誤りとかはありません。あなたが、思ったことをありのままに書いて下さい。選択肢のあるものは、数字や記号を選び、文章を記述するところは、自由に書いてください。指示があってから始めて下さい。

Ⅰ 最初に、建学の精神を日本語と英語で書いてください。

Ⅱ **保育者として、建学の精神を実践する、**ということは、どんなことをすることだと思いますか。あなたが、実際にできても、できなくてもよいから、思いつくことを、下の１枠に１つずつ、できるだけたくさん書いてください。

Ⅲ **学生生活のなかで、建学の精神を実践する、**ということは、実際にどんなことをすることだと思いますか。あなたが、実際にできても、できなくてもよいから、思いつくことを、下の１枠に１つずつ、できるだけたくさん書いてください。

Ⅳ 本学は、単科の小規模な短大なので、授業をはじめ、いろいろな機会に、学生、先生、事務職員、それぞれと親しくなりやすい雰囲気があります。こうした雰囲気の学生生活を体験して、建学の精神が生きていると感じることもあれば、建学の精神に反すると感じることもあると思います。

①建学の精神が現れている、あるいは建学の精神が生きていると感じたことがあれば、３つ以内書いてください。

②建学の精神に反する、あるいは建学の精神とは違う、と感じたことがあれば、３つ以内書いてください。

Ⅴ 建学の精神に関して、次のような意見をどう思いますか。5段階(5,そう思う　4,ややそう思う　3,どちらともいえない　2,ややそう思わない　1,そう思わない)で評定してください。

1. 学生たちは建学の精神を実践している。　(　　)
2. 先生たちは建学の精神を実践している。　(　　)
3. 事務の人たちは建学の精神を実践している。　(　　)
4. 私は建学の精神を実践している。　(　　)
5. 本学は建学の精神についてよく教育している。　(　　)
6. 本学では建学の精神について話し合う機会が多い。　(　　)

Ⅵ 建学の精神は、聖書のどこから出ているか知っていますか。
1. 新約聖書　2. 旧約聖書
の　　章　　節

次のページには、指示のあるまで、進まないでください。

Ⅶ　下にイメージを表す言葉の対が並んでいます。建学の精神「愛をもって仕えよ」は、左右のどちらのイメージに近いと思いますか。７段階で評定してください。

・できるだけ、左右いずれかに○をつけてください。

・どうしても決められないときだけ、「どちらでもない」に○をつけてください。

愛をもって仕えよ

	非常に	かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	非常に	
1. むずかしい								やさしい
2. 親しみにくい								親しみやすい
3. 暗い								明るい
4. つまらない								面白い
5. しんどい								楽しい
6. かたくなった								のびのびした
7. 狭い								広い
8. ストレス								リラックス
9. ほど遠い								身近な
10. たてまえ								ほんね
11. 子どもっぽい								大人っぽい
12. 負担である								当たり前である
13. 単独行動								集団行動
14. 自己犠牲								自己実現
15. 努力								才能（天性）
16. 束縛								自由
17. 強制的								自発的
18. 依存的								自立的
19. 一方的								相互的
20. 消極的								積極的
21. 日常的								行事的
22. 具体的								抽象的
23. 現実的								理想的
24. 女性的								男性的
25. 母性的								父性的

○のつけ忘れがないか、もう一度点検してください。

ご協力有り難うございました。

Nagoya Ryujo (St. Mary's) College, Annual Report of Studies, Volume 24, 2002

Students' Views on "BY LOVE SERVE"

Iwai, Yuji*

本学学生に、建学の精神「愛をもって仕えよ」について、いくつかの視点から調査を行った。

まず、建学の精神の記述を求めたところ、正答率は80%であったが、出典の正答率はゼロであった。また、学生の愛のイメージは母性的で、神の愛ではなかった。建学の精神は、聖書から離れて一人歩きしていた。

保育者として、あるいは学生生活のなかで、建学の精神を実践するとはどういうことか、自由記述を求めたところ、いずれも情緒的な人間関係を大事にして、私が相手のために尽くす、と言った常識的内容であり、神に愛されているから、人も互いに愛すという、聖書のメッセージから、保育者、あるいは学生生活を考えた、という記述はごくわずかであった。

建学の精神が生きていること、建学の精神に反すること、の記述をみると、教職員や他の学生が私を、愛してくれたと感じる内容が前者であり、愛してくれないと感じる内容が後者であり、自分の利害が中心であった。

これらの記述をもとに、建学の精神は、神の愛によって、よい保育者の奴隷から自由になり、子どもの奴隷となって自由を得ることであることを、検討した。

キーワード：建学の精神，よい保育者，愛，聖書，保育者養成

**Nagoya Ryujo (St. Mary's) College*